

安吾の新日本地理

消え失せた沙漠——大島の巻——

坂口安吾

青空文庫

この正月元旦に大島上空を飛行機で通過したとき（高度は三千メートルぐらいたったらしい）内輪山の斜面を熔岩が二本半、黒い飴ン棒のように垂れていただけであった。くすんだ銀色の沙漠はまだ昔のままであつた。だいたい機上から見下した山というものは、およそ美しくないものです。ただ無限のヒダやシワがあるだけで、山の高度も山の姿も存在しないのです。ところが大島だけは、そうではない。黒い火口があつて、内輪山の斜面を垂れ下る二本半の熔岩があつて、銀色の沙漠がそれを取りまいて、その周囲にいわゆる山があるわけだ。いわば海の上へスリバチを伏せたようなケーキをおいて、その上に白いクリームをかけて、クリ

ームの中央へチョコレートをかけ、そのチョコレートが二本半クリームの上へ垂れているように見えた。火山の凄味などは全然感じられない夢の国のオモチャのような美しいものであつた。

その後、三月と四月の大爆発で広い沙漠の半分を熔岩がうめてしまったという。昔の大島を御存知の方はお分りであろうが、あの沙漠を熔岩がうめてしまうというのは大変なことですよ。御神火茶屋まで登つても、さてそれから沙漠を横断して内輪山の火口壁まで行くのが大変だ。砂だから歩きづらいということもあるが、あの沙漠をうめる熔岩ならアタミと伊東の二ツの市をまとめて下に敷き隠してしまうのはワケはない。おまけに、沙漠はかなりの高さの外輪山で壁をめぐらしているから、熔岩は相当の厚さで沙

漠に溜り、壁よりも高く溜らないと、海へ向って流れ落ちることがない。目下のところ、溜った熔岩の厚さは平均して二十米メートルぐらいだろうという話であった。

大島の測候所で私は言われました。

「とにかく、見なければ分りません。百聞は一見に如かずですよ」
科学者が説明ぬきでこう言うのだから面白い。まさしくその通りであった。沙漠をうめつくした熔岩の原野を見るとウンザリするね。言語道断な自然の暴力にウンザリするのです。原子バクダたいふうンで颱風の進路を変えるなどというのはまだまだ夢物語だそうで、颱風のエネルギーにくらべると、長崎でバクハツした原子バクダンのエネルギーなどはその何千分の一という赤ん坊のような

ものだそうだ。そういう自然の威力と人間の小さくは三原山の熔岩を見ると身にしみますよ。ただ、そこには原子バクダンが人間に与える実害のような地獄絵図はない。ただガツカリするほど雄大です。まったく見なければ分りません。

この前に三原山が海岸まで押し流した熔岩は天和四年から元禄三年の七年間にわたる噴出によるのだそうで、二百六十年ほど昔のことだ。安永三年（西暦一七七四年）に今まで沙漠の中に、内輪山よりに残っていた熔岩をだしたのだそうだ。

すると、安永以前から沙漠があつて、安永の噴火には沙漠のちよつと一部分に、熔岩が流れてた程度であつたが、今度のはそつくり沙漠を覆い尚流出の勢いなほであり、元禄以来二百六十年ぶり

いう大爆発らしいや。今のところ、泉津側と波浮側に沙漠が残っているが、これ以上熔岩がたまると、映画屋が沙漠のロケーションに音をあげてしまう。もつとも、鳥取県の海岸に相当の砂丘や砂原があるそうだ。

この熔岩が風化して再び沙漠になるには百年か二百年もかかるのだろうか。とにかく三原山といえば沙漠が名物であったが、その沙漠が一九五一年に失われて、熔岩原となった。そして今後は熔岩原が三原山の新名物となって、再び沙漠が名物になるには百年もかかるとすると、これは一つの歴史的な爆発に相違ない。三宅島も地熱が高くなって水がかれ、木がかれはじめたので、噴火が起るのじやないかと調査団が今朝現地へ到着したと新聞が報じ

ている。

前回、大島が噴火した安永年間にも、三宅島、八丈、青ガ島が相ついで噴火し、特に青ガ島は再度にわたってサンタンたるものであつたらしい。三原山が活動をはじめた、鳴動した、黒煙をふいた、という話は、関東大地震の後だけでも何べんあつたか知れないね。黒煙をモクモクとふきだしている写真が何度も新聞に現れて人気をよび、私も見物にでかけたものだ。ところが、今から思えば、あんなのは噴火の卵にも当らんようなものだね。

新聞の写真が過去に於てそうであつたように、噴火といえは黒煙天ちゆうに沖ちゆうするものだと思つていましたね。十何年か前にドイツのフランク博士というカメラマン兼映画カントクが来朝して、日本

側では早川雪洲、原節子主演の「新しき土」とやらいう日独テイ
ケイ映画をつくった。そのとき浅間山のバクハツ瞬間を撮そうと
いうのでカメラをすえつけ、何人かの日本人の映写技師が何ヶ月
もバクハツを待つてカメラにすがりついていたそうで、バクハツ
の瞬間にスイッチのボタン一ツ押すために大の男が何ヶ月もポカ
ンと暮しているとは有為の男子に対する大侮辱デアル、と大そう
怒っていましたね。なるほど定九郎のイノシシや仁木弾正のネズ
ミよりもダラシがないような職業的劣等感にハンモンしたかも知
れんな。第一キリがねえや。しかしキリがなくって、いつの日が
バクハツだかわけが分らんところに役の意味があるのだが、日本
では珍しくもないたかが浅間山のバクハツにすぎないのだし、命

じるのは外国人のそう手腕卓抜とも思われぬ同業者にすぎないではないか。日本の男の子の面目まるつぶれというモンモンたる心事になやんだのはムリがない。自発的な仕事でないと、こういうバカなことはやれません。クラカトアのバクハツを数年がかりで待ちかまえて、ついに七年目とかにバクハツ瞬間をカメラにキャッチした大人物もいたそうではありませんか。

とにかく、おかげ様で浅間山のバクハツ瞬間というものを我々も見物させていただいたわけです。あれも黒煙天に冲しましたね。浅間山のバクハツはまさに黒煙天に冲するという性質のものだそうですね。

ところが、三原山はそうではないそうです。火山弾を打ちあげ

るだけで、ほとんど黒煙をとみなわかない。熔岩に粘性が少いと噴煙がないのだそうで、富士山などもそういう性質の山だそうだ。しかし黒煙モウモウたるときもあるが、それは火口内の壁がくずれた時に煙がでるのではないかと一応見られているのだそうだ。

富士山の宝永四年（西暦一七〇七年）十一月二十三日のバクハツの記録によると、前日の夕刻から地震五十回あまり、当日は算えるべからず、午前十時天からまるい光団がふるとともに黒煙空にみなぎって鳴動し、午後八時に火焰もえ、火の玉天に冲す。なるほど、三原山式ですね。その後十日ほどにわたって黒煙山をおいつつあるかと思うと、時に火の玉をふきあげ、火焰もえたち、またもや黒煙が、一面をおおうというようになり返しています。

表面が砂のような富士山だから火口壁も再々くずれ火の玉と黒煙の噴火が入りまじって起つたものらしい。今回の三原山のもそうらしいが、富士山の記録にくらべると黒煙におおわれるよりも、火の玉だけ打ちあげるバクハツの方が多そうですね。主として直径一寸ぐらい、時に直径一尺位の火山弾もうちあげているようですが、打ち上げる高さはせいぜい二三百米にすぎず、内輪山の火口壁周辺にころがり落ちる程度で、沙漠の外側の外輪山で見物している我々には全然危険がないようだ。黒煙をふきだす時でも、煙の高さは五百米位にすぎないそうで、浅間山のように天高く、また遠く山麓に向つて広範囲に火山弾や火山灰を噴き散らすことはないらしい。

三原山は多量の煙をださない代りに多量の熔岩をだす。昔人々がとびこんで自殺した火口は去年以来のバクハツごとに熔岩でふくれあがり、今では昔の火口が熔岩でいっぱいになって熔岩の湖となり、その湖上にさらに熔岩がもりあがって山をきずいたのが新火口である。三原山の最高所は波浮よりの外輪山の剣ガ峯という七五五米のところだが、新火口は現在に於てそれとほぼ同じ高さの山（コニーデというそうだ）をなしているそうだ。

その新火口のテツペンから、バクハツにつれて熔岩がモロモロわきだすのだらうと思うと、さにあらずだそうだね。もつと下の横ツチョに、山の腹をやぶって熔岩をふきだす孔があるのだそうだ。今は二ツある。先日までは三ツ現れた時もあるそうだ。その

白い閃光を放つ口から音もなく熔岩がでるのだそうだね。薄気味わるい話さ。なんしろ地底から火の玉を噴いたり、火の川がモロモロと音もなく流れでてくる騒ぎであるから、天地と共に変りあることなし、などゝ子孫に訓辞をたれていられない。測候所の技術者が山へ観測にでかけて、新火山を写真に撮してきた。現像してみると新火山の横ツチヨに（まア山のノドクビ、あるいはハナや口ぐらいの高さのところ）孔ができてるのですよ。相当大きな凹みで、火山のヘソのような妙にハッキリしたものだ、撮影した人は肉眼の観測ではそれに気付いていなかったそうだね。

「フィルムのシミかも知れませんか」

測候所の方々は私たちにその写真を示して、こう控えめに仰おっし

有^やった。次回の観測の時にはもうそのヘソはなかつたし、その後再び現れないから、学者は素性のハッキリしない現象を一応オミットしてフィルムのシミでしようなどと仰有り変なコジツケをなさらない。しかし、撮影した原板は二種あつて、そのどちらも山のノドのあたりにヘソができていたのだから、フィルムのシミではないし、タダモノではないらしい。

「二ツの写真のどツちにも同じ孔があるのはシミにしては妙ですな」

と素人が伺いを立てると、学者方は、アツハツハ、とお笑ひになる。それ以上は仰有らん。科学は怪談をよせつけない。しかし、山そのものが火の流れであつたり、カルメのようにふくらみ

つつある怪物だから、こういう妙テコリンなヘソができたりなくなったりするようなことがチヨイ／＼あつても、素人は一向におどろきませんや。

「この山の底は大いなる空洞であろう。それは確実な事である。そしてその大いなる空洞がいつ凹むか。それは気掛りなことである」

という意味のことを、私の同行者はしきりにブツブツ呟いていた。彼はまだ三十にならぬ若者である。我々が熔岩の上へよじのぼり黒いデコボコの大原野の一端に立ったとき、彼は足もとの熔岩のスキマから湯気のふきあげるところに怖れ気もなく指を当て、

「キヤツ！」と飛上つてキチガイのように肱ひじをふった。相反する妙なことを喋つたり行つたりする人物で、彼はオモム口にタバコをとりだして、湯気の中へ差込んだが、湯気から火がつくという話はきいた事がないね。しかしこれを現代では実証精神というのかね。

「湯気のために火が付きません」

彼は嬉々と声高らかに実証の結果を報告する。アメにならないように気をつけてくれ。

熔岩の熱は、測りに行けるところで千三百度。二千度ちかいたころもあるそうだ。こういう高熱は電氣を用いて測るのだそうだね。この熔岩が斜面を流れ落ちてくるのが毎秒四米ぐらい。人間

が斜面を駆け降りると私のようなデブでも毎秒十米は越すだろうから、イヤ、デブは加速度によつて早いかね、追ツかけられても怖くはないらしいや。沙漠まできて平地を這いはじめると、時速二メートル八十センチというから、カタツムリのようなものだ。こういうノロマだから熔岩原の表面は実に怖るべきデコボコだ。しかしこういうノロマな速力で、いつしか広い沙漠を二十米の厚さに埋めたのだから、根気のいいのと気前よく吐きだすのには呆れるね。同行の青年が、地底は穴である。それがいつ崩れるかそれは気がかりであると呟く心事が分らぬことはない。この活動はまだ相当つづくらしいから、そのうちに外輪山を破つて海へ向つて流れはじめるとも知れない。すでに、その時にそなえる用意は

完了したそうだ。むかし、スベリ台というのがあったね。外輪山から海へかけては全島ジャングルであるが、間伏の方だけ不毛の砂丘が四百米ぐらい垂れさがっていました。そこへスキー回転競技式の曲線型にレールをしいてオモチャの自動車にお客をのっけてアツというまにすべり降りる仕掛けがあった。私もそれを用いて降りたことがあったが、あんまり、よその大人はそのような降り方に愛着がないらしく、スベリ台で間伏の方へ降りようというヒマ人の姿を見かけなかったものさ。物好きのアベックでもやらないという実に色気のないものだったね。いまや往昔私のようなバカモノを滑り降した代りに、この不毛の砂丘へ熔岩を落下させようという計略だそうだ。熔岩はまんまと計略にかかって定めのと

路を落ちるだろうという予定だね。十年前の私のように。

いま御神火茶屋から火口へ行くには、熔岩原を横断するわけに
いかないから、外輪山と押しよせた熔岩の間に幅十米ぐらいのス
キ間が残って谷をなしてるところを迂回して行くのであるが、大
廻りだし砂の道だし、急いでも片道一時間かかるそうだね。私は
行けなかった。視界二、三米という物凄いモヤにまかれて、とて
も歩かれない。おまけに熔岩原をわたってくるモヤだから人肌の
ように生あたたかいや。ちよつとゾツとしますよ。このモヤも火
山の一味で、火山と同じように怪しき活動を行う魔物のような気
がしたね。アツというまにベールをかけられ、モヤモヤと襟クビ
へ、フトコロへと忍びこまれて、にわかには視界を失ってモヤの中

にただ一人沈没している。おまけに目かくしした奴が生あたたか
い。だから妖しい気持だね。ホウホウのていで熔岩の上から這い
降りて、御神火茶屋へ同行の青年に尻を押されて這い登りました
よ。気の弱い話だが、まア熔岩原の上で生あたたかいモヤにまか
れてごらんなさい。

しかし、その日、どんなにモヤが深かったかというと、翌朝八
百トンの貨物船が元村西南方一キロぐらいの岩礁上に坐礁してチ
ヨコンと乗っかっていましたよ。モヤのせいだ。まだ陸には間が
あると思つて全速で走っていたら、一つの岩礁を乗りこし、勢い
余つて次の岩礁に乗りあげて止つたそうだ。機関部に大穴があい
たそうだね。大きな船が救助にきていた。観光船はノンキなもの

で、橘丸はちかづくハシケに目もくれず見物にでかけて行つたね。そこで乗客をマンサイしたハシケ舟は、とりのこされて、仕方なしに橘丸の御見物がすむまで波の上にブラブラ漂っていましたよ。陸上では見かけられないノンビリした風景でした。陸上のモラルや礼儀に関係なく、しかし、大自然に制約された秩序もユーモアもあるようでしたね。文明の発達によつて生れた不自由さもあるな。その任にあらざるものが、いらざる首をつツこんだつて邪魔になるだけさ。大海にはヤジウマの交通整理の必要もないや。板子の下は地獄だが、海とか空はノドカなものさ。たとえば、かの戦争という海空の連合軍に対してはタダの人間はもはや見物するより手がないというようなアキラメと天下泰平さ、と人類のサツ

ソウたる退化状態がありましたな。

とにかく私にとっては、まの悪い日であった。全島霧につつまれて、時に五米、時に三百米ぐらいの見晴ししかない。とつぜん大噴火がはじまってもそれを見ることができない運命だから、なさけない。霧の火口に見切りをつけ、御神火茶屋から数百米のところ、に湯場と称して、自然噴出の蒸気を利用したムシブロがある。これを見物に行きました。岩をくりぬいた牢屋のようなところ。四囲は自然の岩盤で牢屋の格子戸と同じものが足の下に敷いてある。天の岩戸のような入口をしめると、足の下、の格子の下から四十八度の蒸気が音もなく人間をつつむ。音もなく。これが気がかりな言葉だね。そのオヤジらしい三十七八の詩人的人物が、私

をシゲシゲと見て、

「坂口さんじゃないか」

とおどろく。どうも、その顔が思いだせない。彼は私の田舎の中学校の同級生で出版屋の番頭をやつてる「ザト」という人物のことをきいた。私と彼の共通の友人がザトらしい。すると彼も出版か文学に関係ある人で、ザトを通じて私と一面識があつたに相違ないのである。ヨシナリ君という人だつた。

下山して土地の文学者に訊くと、

「ああヨシナリ君。あの人は大島生れではありません。奥サンが岡田の人で、タメトモ心を起しましてな」という話であつた。内地から来た旅行者がアンコの情にほだされ、天下の大事を忘却し

て島に居ついでしまうのを「タメトモ心ヲ起ス」という由である。湯場の売店に働いていた彼の奥さんはやや美しく、さすがに甲斐性がありそうなアンコだったね。彼女はノドをつぶしていました。毎晩大島節を唄うせいさ。甲斐性があるのだね。島にはタメトモが多いそうさ。タメトモの暮しよいところらしいが、ヨシナリ君は特に優秀なタメトモらしいや。拙者もはやくタメトモになるべきであつたな。常春の島に来て人生の秋を知る。モノノアワレとはこのことさ。

たしかに天下の大事を忘れる島らしい。そのなつかしいオモムキは全島にあふれているね。御神火茶屋に働いてる十六七の娘たちは眼下にせまる熔岩を見下しながら、熔岩がそこまで迫つてき

た時は、ちよつと熱かったが面白くてたのしかつたなどと言つていたね。全島をあげて山上へ見物にあつまり、かけがえのない自分の島の火噴に老いも若きもウツトリしたらしいな。

本日（五月二十三日）午後一時二十一分、遠雷のようなバクハツ音がきこえる。約三十分にわたつて、断続する。私はいきなりペンを投げだして、洋服をきて、旅支度をはじめ。大島のバクハツに相違ない。伊東は川奈の岬が突きだして視界をさえぎつてゐるから、すぐ目と鼻の大島が見えないのだ。朝日新聞の伊東支局へ電話をかけて大島バクハツかどうか問い合せたが、主人が不在で分らない。ぜひなく、古屋旅館へ電話をかけて、きく。古屋の主人が大島の東海汽船へ問い合してくれたが二十分もたつと大

島の返事をきかせてくれましたね。こんなにカンタンに大島と通話できるとは知りませんでしたよ。大島ではバクハツらしいものは目下感じられません、という返事だとき。ガツカリしましたね。こっちはすでに思いこんでいたのだから、キツネにつままれたように半信半疑ですよ。しかし、大島直々の御返事がそうなら、いかに信用したくなくとも仕方がないさ。

どうも寝ざめが悪いのさ。バクハツの実況を実見せず大島を書くのが、まことに筆がすすまないのさ。どうせ書くからには、火口壁でバクハツにでくわし、熔岩に追っかけられてホウホウのいで逃げるようなあんまり利口な人のやらないことがしてみたね。そういうことを賭けるのが、職業のタノシミというもので

すよ。すすまぬ筆をムりに動かしてゐる最中にバクハツ音をきいたから、即座に一人ぎめに思いこみ、にわかにも勇みたち、空襲警報よりも慌てふためいて旅支度をととのえたね。バクハツにあらずと報知がきたときは、魂をぬかれたようなものさ。こういう意気ごみで出かけるときは、船酔いなんかしないものだね。拙者の文学のエネルギーはそのバカらしさで持つてゐるようなものさ。伊東から大島行の定期船は午前の八時半と十一時半にでる。午後は定期船がないから、漁師のチツチャな焼玉エンジンで大島へのりこむツモリであつた。漁師のポンポン船は二年前からナジミなのである。五十米ぐらいの釣糸をぶら下げて全速力で走りながらたぐりよせると、相当大きな魚がぶらさがって現れてくるね。後に板

をひかせて波のりをやったら、檀一雄があんまり勇みすぎて板とともに海中に逆立して網にはさまれ、あわや大事に及ぶところでありました。このポンポン船でも定期船とそう違わぬ速力で大島へ行くことができる。そのかわり、散々海水を浴びなければならぬ。そのためにレインコートを着て家をとび出そうとしているところへ、大島に於てはバクハツは感じていないそうですと古屋主人の落ちついた電話でした。



東京から七時間、一ねむりのうちに。伊東からは二時間、橘丸

だと一時間半でカンタンに行くことのできる大島が、風俗習慣がガラリと変つていゝというのが珍しい。内地を一昼夜特急で走つても、これほど風習の差のあるところはめつたに見られない。

この変つた風習のモトについて多少とも解説できればと思つたが、私の調べたところではとても見当がつかない。

富士山麓は三島の宿の三島明神は東海道では熱田神宮につぐ大社であり、熱田が皇神であるにくらべて、これは事代主ことしろぬし（また古からの別説では大ヤマズミノミコトともいふ）を祀つた日本土着の大親分が祭神なのである。

大昔に神様の一族が三宅島へきて伊予の三島神社を勧請したのを、さらに伊豆の白浜を経て三島へ勧請したものだといふ。途中

に立寄った白浜は今の白浜明神がそれだということだ。これが三島神社の古伝だそうである。

伊予の三島神社というのは瀬戸内海の大三島（オーミシマ）の三島神社であろう。この祭神は大ヤマズミで三島神社の古伝と合っている。延喜式神祇卷では伊豆の三島神社、白浜の伊古奈比^{イコナヒメノミ}命^{コト}神社、ともに名神社であり奈良朝時代から朝廷の封戸をうけたというから三宅島から三島へ移ったのはずいぶん昔のことだ。だから古伝を信用すると、すくなくとも三宅島には奈良朝以前に大ヤマズミを祖神にいただく一族が土着したものらしい。しかしその一族の子孫が今日の三宅島島民かというと全部がそうでもなく、部落ごとに風習の異なるものがあるそうだし、いくつかの神社と

その祭礼の在り方からみると、祭神を異にする異部落民がいつからか合議して村の秩序をつくつていたことは明かのようだ。そしてそれらの祭神は漂流した氏族のものではなくて流人系統のものかも知れん。

大島の土着民には三宅島のような古伝はない。役の行者が流島になつたという伝説が一番古いのだろう。もつとも先住民族の遺跡はある。野増村では熔岩の下から人骨と縄紋土器と石ウスとヤジリなどが出たという。波浮中学校の坂口校長先生（偶然私と同姓）の話によると、元村に現存する藤井氏（赤門というね）が中世の移住で、相当の格式をもち、コードのヤブという祖神を祀つて神官をつとめ、支配的な位置についていたという。しかし、差さ

木地しきじと泉津にはそれ以前からの先住民がいたらしい。その先住民の移住の経路や時代は分らないが、三宅島が奈良朝以前なら、これもそれと同じようにみてよかろう。こういうことは、どうせハツキリ分りやしませんね。

クダクダしく分りもしない歴史をのべたが、要するに奈良朝以前からの原住民のそれと今の大島の特殊な風習と、どこまで関係があるかどうか、全然わからんというのが、私の考えなのさ。実にわが言はバカバカしいが、分らんものは、分らんですよ。

岡田村の民俗学者、白井さんや波浮の坂口校長先生の説では、大島はクゲの流人が多く京言葉が多く残っているという。村の長をスグリといったそうだ。氏族制度時代の古い言葉だね。クニノ

ミヤツコ、アガタヌシ、スグリ村首などのスグリかね。座敷をデイ、寢室をチヨードイなどと云つたし、病氣を「悲シイ」、病氣ニナルが「悲シクナル」、尊トシヤ、だとか、大いに驚く時に「あな、うたてやな」と今も言うそうだね。上代から中世まで、各時代のミヤコ言葉が残っているのはすでに奈良朝時代からクゲの流人が七島へ送られた記録がハッキリしているのだから、うなずける。あなうたてやな、はタメトモかね。天下の豪傑が大島くんだりで用いた慣用句としては似つかわしくないな。各時代の流人が村民に影響があつたのは当然だろう。近代では徳川家康の侍女で朝鮮貴族出身のジュリヤおたアというキリシタン切支丹信徒の女性が家康のそばめ側女になることを拒否して大島へ流され、これも島民に影響を残

している。差木地では娘の剛情を叱るに、今でも「このオタイサマめ！」

と叱るそうだし、泉津では、娘があれをくれこれをくれと慾を云ったときに、

「このオタイサマめ！」

と叱るそうだね。すると、これはオタイサマにあやかれ、という意味ではなくて、そのアベコベの用法であるが、遠島になるほど強情を通したという驚異や感動が村民の心に残ったからのことで、用例が賞讃とアベコベだということにはこだわる必要もないだろう。

しかし、今日もなおアンコ風俗などに残っている大島島民の土

俗の主流をなすものは、流人系統のものではない様だが、どうだろう。

大島の古い民家に特殊な型があつて、それが野増村や差木地にかなり残つていてというので、野増村へ行つてみた。着流しの村長さんの案内で、代表的な旧家を三四軒歩いた。妙な柱の使い方、すべて釘を用いない。土間の形、部屋の間どり、イロリ、棚などみんな在り場所や在り方がきまつている。志摩の漁村の民家も四方造りの独特なものだというが、私はそれを知らないから比較はできない。

しかしこうして古い村落を廻つて、家の内部を見て目につくことは、旧家とよばれる家も特に大きい家ではなく、室内装飾も庭

も殆ど大小なく、目立つような貧富の差が見られないということであつた。だいたいに於て島の生活が、共產部落的であるのは、日本では普通の例である。島の村長は昔から選挙スグリの習慣があつたそうだし、網は共有であつて特定の網元はなく、土地も共有であつたという。もつともそれは維新までの話である。大島に伊豆半島の言葉がまじっているのは、近いのだから当然だが、志摩に似たところもあるようだ。そうかと思うと、海で働くのは男で、女は畑が専門だ。けつして海の仕事をやらないところはアマで名高い志摩の男女の生態とは全く相いれない。

私はむしろ風俗の主流をなしているものは沖縄に似た部分が他の類似よりも多いのじゃないかと思つたが、これとても比較的な

ものにすぎないし、私は沖縄の古い風俗には知識が殆どないのだから、私の推量も当にならない。アンコ風俗を白井氏は京風の転化という説明であるが、そうこじつけるよりも自然の類似を沖縄に見出す方が面倒がいらぬね。私はそのうち沖縄の女の子をつれて大島へ遊びに行ってみようかと思っている。彼女らがアンコ風俗のどんどころに自分の類似を見出すか、ちよつと興味があつるように思うね。

しかし、むろん沖縄と大島にはかなりの類似があるらしいといふだけで、大島島民の主流が沖縄だときめるのは不可能なことだ。

坂口先生からきいた話だが、大島からのツバキ油売りと名のる行商人がきた時に、その真偽を見破るカンタンな方法があるそう

だ。もつとも今では行商人となつて島外へでる者は一人もないから、鑑定をまつまでもなく、みんなニセモノにきまつているそうだがね。

大島島民は「カキクケコ」を「ハヒフヘホ」に発音するのだとさ。柿の木が「カヒの木」、猫の子が「ネホの子」、筍が「タヘノコ」。但し接続する時だけで、字どまりの木や子は同じキでありコだそうだね。

三宅島には排外的な気風がやや目立つそうであるが、大島の人たちは、男女ともに明るくて、人みしりしなくて、親切である。どうも全般にわたつてタメトモの住みよい島にできてるようである。野増村の着流しの村長は私が大島で会った人たちのうちで誰

より無愛想でニコリともしない人物であつたが、根は甚しく親切なようであつた。実に氣むずかしくムツツリしながら、しかし私の方が降参するほどもう一軒、もう一軒と念入りに案内してくれる。魚屋の前を通りかかると、にわかには店内へ声をかけて、「さっきのアレ、こまかくしたかね。まだなら、東京の人に見せてくれないか」という。

「へエ、まだですよ」と魚屋が一家総出でとびだしてきて、妙なヘツピリ腰で怖る怖る奥からぶらさげて来て、見せてくれたのがなるほど、これは怪物だね。私が怪物に近づこうとすると、魚屋が慌てて、

「オツトツト、手をだすと噛みとられますよ」

長さ一米ぐらいの怪魚「カキザメ」という私が見たことのない怪物です。サンショウウオを平たくしたような奴で、全身をマムシの斑紋の大きいようなのが覆い、陸上の動物には見られないトゲのような怖ろしい歯がゴシャく／＼生えてますよ。魚屋の土間に腹ばいになって人間を睨みつけて、物凄い口をあき、食い殺すぞという殺気マンマンたる形相を示します。せいぜい一米ぐらい、一貫から三貫までぐらいの小さいサメだそうだが、こんな怖るべき形相の魚を見たのははじめてであつた。肉はうまいということだ。なるほど、そうかも知れんと思つたね。第一、つらだましい面魂がなんと物凄くて癩にさわるから、是が非でもモリモリ食つてやりたいと思うね。切身を買ってきて大いに食うべきであつたよ。着

流しの村長はこういう怪物をわざわざ見せようとする親切をもつていた。私がこの怪物に呆れていると、野増村の人たちまで怪物を珍しがって集って来たから、島民にとつても見なれた怪物ではなかったようだ。

大島の学校では野球がはやっているらしく、通学にグローブやバットをたずさえている男の子が多い。一方、セーラー服の女の子が時々カバンを頭にのっけて椿の並木を歩いている。妙テコリンの対照は、ひどく大島的でもあるし、日本自体のカリカチュアのようにもあつたね。

この島は流れる水も湧く水もないし、米もない。しかしそういう欠乏は島民の生活からは分らない。どの家でも牛を飼っている

し道路の上で牛の乳を搾っている。有るものがひどく豊富に有るように目立つだけで、無いものが無いように目立たないのは、太古の人の如く大国主的に大らかで健全なんだろうね。

物資がないと云えば、痛快にないね、観光ホテルでは、お客が食べたいものを注文するとそれから買い出しに行くというノンビリしたものであった。さればとて旅客がそれで不自由を感じるわけでもなく、ちゃんとそれが出来上った生活があつて、要するに旅だ。大島には、いろいろな物資だのネオンだの大島銀座、ハブ銀座などはないが、コルシカやタヒチのような旅があるね。コルシカやタヒチへ行つたことはないけれども、神経衰弱の文明人がたぶんそこで感じる旅と同じような何かを大島でも感じられるよ

うな気がするね。その旅は日本の温泉旅行とはまた違うものだ。豊富な食べ物がなければならんというものではない。その土地の限定の中へ旅人を限定する力のあるのが「旅」なんだね。つまり、旅行者というものを、常に一時的に自分のタメトモにするだけの何かが必要なのだね。メリメがコルシカに、ゴーガンがタヒチに見出した旅のような、何かが。まあ、ゴーガンはタヒチのタメトモには相違ないが、しかしタヒチのゴーガンから我々が感じるものは、彼がそこで土人の女と結婚したというタメトモ的なことではなくて「旅」ですよ。大島には、とにかくそれがあるね。日本内地には長いこと汽車にのつても、なかなかそういうところはありません。とにかく名題の大ホテルにメニューがなくて、お客の

注文をきいてから買だしにでかけて注文とちがった妙な牛乳料理を静々と運んできても、それが一向に苦にならず却ってなんとなく親しめるような「旅」というものを大島に於てやや味うことができるね。そして、村のアンコたちと外輪山で噴火でも見物しておれば、否、ホテルのバルコンでボンヤリ見てもいいが、メリメがヴィナスの石像に殺される男の幻想を得たような旅愁を、実はすべての旅行者が感じる理由があるのかも知れん。日本にも、それぐらいの島があるということにしておこうよ。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 Ⅱ」筑摩書房

1998（平成10）年12月20日初版第1刷発行

底本の親本：「文藝春秋 第二九巻第九号」

1951（昭和26）年7月1日発行

初出：「文藝春秋 第二九巻第九号」

1951（昭和26）年7月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力・tatsuki

校正：深津辰男・美智子

2010年1月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

安吾の新日本地理

消え失せた沙漠——大島の巻——

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 坂口安吾

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>